

リベルテンの会堂に属するユダヤ人たちとの議論がきっかけで、ユダヤの議会へと強制的に連れて来られたステパノは、偽りの証人たちによって、聖なる所（神殿）とモーセの伝えた慣習（律法）を汚す者として訴えられました。そして、それは、ステパノが宣べ伝えていた主イエスもまた、そのようにモーセと神様に逆らう者であることを意味してわけです。このような偽りの証言に対して、御使いのような顔でメッセージを語ったステパノですが、今日のところは、その最後の部分となります。

前回私たちは、荒野で40年間を過ごしていたモーセに神様が現れて、彼をイスラエルを救う民の指導者としてエジプトに遣わされたことを見ました。ですから、モーセよりも、彼を遣わされた神様に重点が置かれていたと思うのです。でもやはり神様は、ご自分だけでその救いのわざを行われたのではありません。モーセを通して、つまり、彼を用いることで、神様はイスラエルの民をエジプトから救い出されました。

ですから、モーセが語ったことは、彼に「語れ」と言われた神様が語られたことであり、モーセが行ったことは、彼に「行え」と命じられた神様が行われたことです。それゆえに、神様はご自分の救い出された民に対して、彼らがモーセに聴き従うことを要求されました。それが、ご自身に聴き従うことだからです。そして、この時、ステパノを訴えていた人々は、彼らの父祖たちも、彼ら自身も、みなモーセに従ってきたと自負しています。ところが、ステパノは、彼らの父祖たちが、実際にはどのようにモーセに応答したかを語るのです。

39-41 節「ところが、私たちの父祖たちは彼に従うことを好まず、かえって彼を退け、エジプトをなつかしく思って、40 『私たちに、先立って行く神々を作ってください。私たちがエジプトの地から導き出したモーセは、どうなったのかわかりませんから』とアロンに言いました。41 そのころ彼らは子牛を作り、この偶像に供え物をささげ、彼らの手で作った物を楽しんでいました」。

ステパノは、何と言っていますか？彼らの父祖たちは、モーセに従ったと言っていますか？いいえ。彼らはモーセに従うことをせず、かえって彼を退けたのです。そして、それは、モーセを遣わされた神、モーセによって自分たちを救って下さった神様を、彼ら自身が退けたことを意味していました。彼らは、奴隷であったエジプトをなつかしく思うことで、モーセの兄アロンに金の子牛を作らせ、偶像に仕えることを願ったのです。

これを聞いて、あなたはどう思いますか？「彼らは四百年以上もエジプトにいたから、異教の神々に仕える習慣が身についていた。それはエジプトで生きていくために必要だったので、その習慣からすぐに抜け出せなかったのも無理はない」と彼らに同情されるのでしょうか？これはどうですか？「モーセは、山に登って40日も帰って来なかったの、民はモーセが死んだと思い、兄のアロンに指導者となることを願った。その上で、モーセの杖の代わりとなるもの、つまり、目に見える形での神の存在（子牛）を必要とした」。どうでしょう？

理由が何であれ、もしユダヤ人たちが、「自分たちの父祖たちがモーセに従わなかったこと」を事実として認めるなら、ステパノと主イエスに対する「モーセと神様に逆らう者」という彼らの訴えは、そのまま自分たちに返ってくることとなります。少なくとも、彼らの父祖たちはそのような者であったと認めざる負えません。反対に、もしそれを否定するなら、それは、出エジプトからこの時に至るまでの自分たちの歴史を否定してしまうこととなります。どちらにしても、彼らは逃げ場のないところへと追い込まれるのです。

では、そのようにモーセと神様を退け、偶像に仕えたイスラエルの民に対して神様はどう応答されましたか？
42-43 節「そこで、神は彼らに背を向け、彼らが天の星に仕えるままにされました。預言者たちの書に書いてあるとおりです。『イスラエルの家よ。あなたがたは荒野にいた四十年の間に、ほふられた獣と供え物とを、わたしにささげたことがあったか。43 あなたがたは、モロクの幕屋とロンバの神の星をかついでいた。それらは、あなたがたが拝むために作った偶像ではないか。それゆえ、わたしは、あなたがたをバビロンのかなたへ移す。』」。

神様は、ご自分を退け、神様の被造物である天の星を拝む民に対して、背を向けられ、そのままにされました。ここで引用されているのは、アモス書5章25-26節のことばですが、アモスは紀元前8世紀前半から半ば

にかけて活躍したと考えられる預言者です。少し説明を加えるなら、モロク（ヘブル語ではモレク、70人訳ではモロク）の幕屋とは、アモン人の神を指し、彼らには子どもを焼いてささげる習慣がありました（レビ18:21、20:2-5）。後にダビデの子ソロモンは、エルサレムの東の山の上に、この神を礼拝する高き所を築いたとあります（1列1:7）。またロンパとは、土星と関係のある神の名で、旧約では「キウン」と呼ばれています（アモ5:26）。

いずれにしても、あれだけの救いを体験しながら、すぐにご自分のことを忘れ、偶像に仕えるイスラエルの民を神様はそのままにされるのです。そして、それは彼らにとっては「やがてバビロンのかなたへと移される」ということを意味していました。神様は、預言者たちを通してそのことを予め語っておられましたが、彼らは立ち返ることをしなかったのです。それゆえに、それは現実のものとなってしまいます。それでも神様は、彼らを完全に捨てられたわけではなく、その後も、アブラハムへの約束の祝福を受け継がせる「彼の子孫」としての主イエス・キリストが来られるために、イスラエルの残りの民を導かれるのです。

その証拠として、神様はご自分がイスラエルと共におられることを「あかしの幕屋」を通して表されました。44-47節「私たちの父祖たちのためには、荒野にあかしの幕屋がありました。それは、見たとおりの形に造れとモーセに言われた方の命令どおりに、造られていました。45 私たちの父祖たちは、この幕屋を次々に受け継いで、神が彼らの前から異邦人を追い払い、その領土を取らせてくださったときには、ヨシユアとともにそれを運び入れ、ついにダビデの時代となりました。46 ダビデは神の前に恵みをいただき、ヤコブの神のために御住まいを得たいと願い求めました。47 けれども、神のために家を建てたのはソロモンでした」。

「あかしの幕屋」の中には、「あかしの箱」（出エジ25:22）と呼ばれる契約の箱があり、そこには、神様がモーセに与えられた十戒を刻んだ二枚の石板が入れて 있었습니다。神様は、この「あかしの幕屋」を通して、ご自分がイスラエルの中におられることをあかしされたわけですが、それが、後にソロモンによって建てられる神殿の存在となっていくのです。ですから、その流れでいうなら、ユダヤ人たちが聖なる所としての神殿と律法とを非常に尊んだのは、当然のことといえます。

では、どうでしょうか？神様が不従順なイスラエルの民を完全に捨てられることなく、あかしの幕屋を通してご自身を現されたことと、神様がその聖なる所だけに臨まれるとすることは、同じでしょうか？同じではありません。カルデヤ人の地に住んでいたアブラハムに現れ、彼を召し出された神様は、またシナイ山の荒野の燃える柴の中で御モーセに現れた神様は、決して一つの場所にだけ臨まれる方ではありません。神様は、目に見える所としての幕屋や、弟子たちがその建物のすばらしさを見て驚いた神殿よりも遥かに大きな方、地上のものを超えて天地万物を造られたお方です。ステパノが、イザヤ66:1-2から引用して語っている通りです。

48-50節「しかし、いと高き方は、手で造った家にはお住みになりません。預言者が語っているとおりです。49 『主は言われる。天はわたしの王座、地はわたしの足の足台である。あなたがたは、どのような家をわたしのために建てようとするのか。わたしの休む所とは、どこか。50 わたしの手が、これらのものをみな、造ったのではないか。』」。

神様は、人が手で造った家に住まわれる方ではありません。主ご自身が「天はわたしの王座、地はわたしの足の足台である。…わたしの手が、これらのもの（すべて）を造ったではないか」と言われるからです。では、なぜご自分が共におられるしるしとしての「あかしの幕屋」を、神様はイスラエルにお与えになられたのですか？それは不従順な民の中であって、モーセのように民の代表となる祭司を立てることで、彼を通して語られるためです。といっても、祭司もまた罪ゆえに汚れた存在です。そのような者が、そのままの状態ですべてに近づくとはいけません。即死です。だからこそ、神様は、その代表者がいけにえの血を携え出ることを通して、ご自分に近づくことを許されました。それによって民を赦し、祝福して下さるためです。

でもイスラエルの民は、主との関係を形だけのものにしてしまいます。偉大な神様を神殿の中に閉じ込めてしまうのです。みことばに聴くことやささげものは形式化していきました。彼らは、そのようにして神様を自分たちの理解できる小さな存在とし、また自分たちの言いなりのようにすることで、生きて働いておられる真の神を退けたのです。外側は敬虔のようでも、彼らの内側は、実に自己中心な思い、罪で満ちていました。

そんなユダヤ人たち（特に指導者たち）の偽善を見抜いて、主は彼らを厳しく非難されましたが、ステパノもこの最後の部分で彼らを強く非難しています。51-53節「かたくなで、心と耳とに割礼を受けていない人たち。あなたがたは、父祖たちと同様に、いつも聖霊に逆らっているのです。52 あなたがたの父祖たちが迫害しなかった預言者がだれかあったのでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを前もって宣べた人たちを殺したが、今はあなたがたが、この正しい方を裏切る者、殺す者となりました。53 あなたがたは、御使いたちによって定められた律法を受けたが、それを守ったことはありません。」

肉体においては、彼らは、アブラハムに与えられた神の民としてのしるしである割礼を受けていました。でも、その内側としての心と耳においては割礼のない者、自己中心という罪が、彼らの心を支配していたのです。ですから、本当の意味において、彼らは神様のもの（民）とはされていませんでした。だから、ステパノは「あなたがたは、父祖たちと同様に、いつも聖霊に逆らっている」と言ったのです。すでに見たように、彼らの父祖たちは、モーセに聴き従わなかっただけでなく、神様が遣わされた他の預言者たちにも聴くことをせず、かえって「やがて正しい方が来られる」と前もって語った預言者を迫害し、殺しました。

それと同様に、その子孫である、当時のユダヤ人たちは、その「やがて来られる正しい方」としての神の御子イエス・キリストを裏切り、十字架にかけて殺したのです。彼らは、御使いたちによって定められた律法を受け取りましたが、実際にはそれを守る者ではなく、やぶる者となりました。ですから、ステパノもまた、ペテロのように、救い主を殺した者として彼らを断罪するのです。主を拒み、平気で偽りをいう彼らこそ、「モーセと神に逆らう者」であると。

いかがでしょうか？このメッセージは、直接的には、当時のユダヤ人たちに向けて語られたものです。でも、神様は、聖書を通して今日を生きる私たちにも語っておられます。皆さん、あなたは神様と神様が遣わされたモーセに聴き従う者ですか？モーセは、主イエスのことを指して、「神様は、私のような預言者を後に立てられる。彼の言うことに聴きなさい」と命じましたが、あなたは今日、主イエスに聴き従っていますか？

天地万物を創造された主は、幕屋や神殿といった建物（今でいうなら教会）の中だけにおられるのではなく、地に満ちておられる方です。もっというならば、悔い改めと信仰をもって主イエスにつくバプテスマを受けた者（私たち）のうちに、聖霊を通して住んで下さる方です。あなたは、ご自分がそのように神の神殿とされていることを自覚し、いつも聖霊とみことばに従うことで、神様の栄光を現しておられますか？それゆえに、あなたの主との歩みは形式的なものではなく、主のいのちと力、喜びと賛美に満ちたものですか？

神様が、異邦人である私たちをも、永遠の祝福を受け継ぐ神の子として下さったのは、ご自身がアブラハムになされた祝福の約束ゆえです。私たち自身が正しく、それを受けるにふさわしい者だからではありません。私たちはどうあがいても、神様から祝福を受け継ぐ者にはなれない、罪ある存在だからです。でも神様は、イスラエルの民を救うためにモーセを遣わされたように、私たちを罪と滅びから救うために、「正しい方」として救い主イエスを遣わして下さいました。主を私たちの代わりに呪いの木にかけてさばくことで、私たちを赦し、祝福された者とするためです。私たちはそんなにすばらしい救いを、主イエスの恵みのゆえに、彼を信じる信仰によって受けています。そうであるならば、その救いの保証である聖霊に逆らう理由がどこにありますか？聖霊を通して主が共におられることを信じ、この方の助けを期待しつつ、主に従おうではありませんか。